



佐野茂樹さんを偲ぶ そして考えたこと

高原浩之 (元ブンド・元赤軍派)

一月二十一日、元ブンド議長の佐野茂樹さんが亡くなった。一九六七年、二つの羽田闘争の後、「国際主義と組織された暴力」と総括し、高揚した気分であった十一月か十二月、佐野さんが京大に来了。東京に行き、ブンドの指導権を奪取し、中央で活動しようとするオルグされた。一も二もなく「よし！」。六八年一月、エンブラ・佐世保現地闘争の後に上京した。

思い出 関西ブンドの大挙上京

六八年二月のブンド第七回大会で、佐野さんは議長に就任した。私は少し後に学対部長に就任した。しかし、ブンドの指導を担うことができず、十二月の第八回大会で、佐野さんも私も辞任した。それでも、佐野さんは軍事委員長、私は共闘関係担当として、一緒に六八年四・二八「中央権力闘争」を準備した。重信の回顧の通り、明大二部に協力を求めた(赤軍派参加の契機)。佐野さんと一緒に活動はここまで、この後、私は赤軍派に走った。

他人の「痛み」は分からない。「痛み」は自分が受けて初めて分かる。後悔しても遅いが、連合赤軍事件の要因は、七・六事件に、そのまた要因はこの第七回大会にあった。連合赤軍事件や「対革マル戦争」は、日本の人民闘争と革命運動に壊滅的な損害となった。国際共産主義運動には、スターリン以来、「粛清」が常に存在した。この悪い体質は必ず清算されなくてはならない。「内ゲバ」「リンチ」には生身の人間関係がある。清算のためには、被害者に対する加害者の具体的な謝罪が絶対に必要であると思う。

総括「過渡期世界論」

ベトナム反戦闘争を強力に指導した。しかし、観念論と主観主義が濃厚にあった。

革命の根拠を、ほぼ全て、歴史認識Ⅱ「帝国主義から社会主義への過渡期」に求めた。政治的・上部構造を経済的土台から切り離し、資本主義の帝国主義段階の継続を分析しなかった。日本革命を、日本帝国主義の内在的矛盾からではなく、ほぼ全て、国際主義Ⅱ「三プロロック階級闘争の結合」から展望した。極限が赤軍派の「世界武装プロレタリアート」「国際根拠地建設」に基づく武装蜂起・革命戦争方針であった。

帝国主義を対外的な植民地主義と侵略に一面化し、ベトナム民族解放闘争と連帯する反戦闘争の延長上に帝国主義

「六〇年安保闘争を超える大闘争！」。関西ブンドは大挙上京した。今、思い返すと優に数十人、そのエネルギーは大きい。蓄積を全て注ぎ込んだ。第一波は一九六六年ブンド再建Ⅱ第六回大会。第二波は第七回大会。東京の中部と東部、神奈川と千葉で地区党を建設したが、大部分は後に赤軍派に参加した。第三波は赤軍派分派の後の一九七〇年の「二・一八ブンド」。しかし、失敗し挫折した。

佐野さんを偲ぶと、連合赤軍事件を起こした赤軍派の指導部であった身としては、想いは第七回大会と「過渡期世界論」の総括に行き着く。佐野さんと議論する機会はない。ここでも考えを表明して追悼としたい。

謝罪 ブンド第七回大会

マル戦派に対する「内ゲバ」「リンチ」は大きな誤りであった。その後の大衆闘争の高揚の中、逆にこの大きな誤りを肯定してしまった。関西ブンド上京グループは自己批判し謝罪しなくてはならない。その一人として私は謝罪したい。

打倒を展望した。全共闘運動に依拠し、沖縄闘争や三里塚闘争を闘ったが、しかし、民族問題や農業問題はもろろん大学問題についても、闘争の根本にある日本帝国主義の内在的矛盾の把握はなかった。その問題に対する民主主義的要求と社会主義的解決の指導はなかった。反戦闘争へ動員するしか方針がなかった。

二〇世紀は、実は、まだ、「ブルジョア革命と資本主義化の時代」であった。中心はアジア。中国・ベトナムの官僚資本主義化。韓国・台湾とASEANの開発独裁と権威主義。グローバリズムは、上部構造はアメリカ、そして中国の帝国主義と覇権主義だが、土台は「世界の資本主義化」Ⅱ「資本主義の世界化」である。中心は金融化し産業的に空洞化し、工業は周辺に拡散する。格差が拡大して社会が破壊され、自然も破壊される。

帝国主義の「腐朽性」と「寄生性」の極である。この基礎の上に、二一世紀には、プロレタリア階級の社会主義革命は、工業と農業の関係を再編し、社会を再建し、自然と共生する新しい内容になるだろう。社会主義の「ルネサンス」。マルクス・レーニン主義は、ブルジョア革命の社会主義革命への転化という、歴史的に特殊な実践を基礎としたため、生産力主義が濃厚にある。それは総括され清算されるだろう。

(二〇二〇年六月六日)